



第10号

令和7年2月28日

庄和すずらん幼稚園

保育随想

●幸せってどこから！

梅は咲いたか桜はまだかいな～？春を待つ気持ちを歌ったものですが、誰もが寒いそして例年になく寒波の襲来は、大雪をもたらす生活の中でも命に係わる状況が報じられております。日本のどの地域にも危険と向かい合わせの、そして背中合わせの環境下で、季節が回り春を待つ気持ちは同じであります。地球有史以来季節が移り変わる営みは続いて来たのですが、近年の今までと変わって来た気候変動は、現状もそうですが、これからに不安を抱かせるものを感じます。今までもこれからも、大きな自然の営みの中で生きて行く私たちですので、災害や事故、生活全般にわたる人間生活に、幾らかでも悪い形で影響を避けて暮して行きたいものです。そんな環境下ではありますが、人間はこれからの生きる先に希望を見出し家族や友達と支え合いながら、喜びを生み出す力を持っています。自然の中で咲く先に述べた梅にも、風待ち草、春告げ草などと言う別名も付けられています。健康に生きるための活動も楽しんで生活に取り入れています。どの領域もそうですが、これらの興味関心、得意不得意の意識は、社会人に成るまでの環境や体験から来るものが大きく影響するものと受け止めております。人生に喜びを見出す作業は生きる核づくりに成るものです。日々の生活の中にも、楽しみや喜びを見付けて生きられる人は幸せです。いろいろな環境下にあっても、前向きに生きる気持ちを抱ける人が居るのです。それぞれの方法で楽しみを見出している人に出会えることが、自分を顧みる機会にもなります。この地球上でそれぞれ人が、そんな気持ちで生きているのですから。この季節を迎えると、早春賦の歌詞の一節が浮かぶのです。

これは、作者が長野県安曇野を訪れて安曇野の早春の寒さ、そして春の暖かさを歌った歌詞とされています。

春は名のみ風の寒さや 谷のウグイス歌は思えど 時にあらずと声も立てず
時にあらずと声も立てず 氷解け去り葦は角ぐむ さては時ぞと思うあやにく 今日も
昨日も雪の空 今日も昨日も雪の空 春と聞かねば知らでありしを 聞けば急かる胸
の思いを いかにかせよとのこの頃か いかにかせよとのこの頃か

寒村の雪山を眺めながら、木々の陰に姿の見えぬ小さく息づく命のウグイスの心情に思い至る丁寧な心遣いの作者に感動するのです。そして作者の生い立ちにも思いを馳せるのです。

私達は、目の前のことに心を奪われすぎて、これから先につながることにまで思いを馳せることをしなくなってきたのではないかと、このような歌の世界に触れると思うのです。考えるためには、孤独が必要なのではないかと。人が自分自身と一緒に居ることが出来ない寂しさを感じてしまうのも陥りやすいところです。残念ながら人が居ないと寂しさを感じてしまうのは、自分自身と居られない時があるからで、自分自身と向き合っている状態を手に入れることはさほど難しくないと思うのです。一つの事を自分なりに答えを導き出すのは時間が要ります。時間が必要ですが孤独の時間は、幸せを生み出す時間と受け止めて孤独を怖がらず前を向いて進んで参りましょう。